

スタンダールと愛国心

白田 紘

はじめに

本稿では、十九世紀フランスの作家スタンダール（本名アンリ・ベール、一七八三―一八四二）が、いわゆる愛国心をどのように考えていたかを探ろうとするものである。

スタンダールの生きた時代は、王政から、フランス革命による共和制、ナポレオンの帝政、復古王政、そして七月王政へと体制がめまぐるしく変化し、その間にフランス国民が国家意識に目覚めていった時期にあたる。

そうした国民国家意識形成の糸口であったフランス革命のそもそもは、全国三部会に集った第三身分のブルジョワを核に下級貴族と僧侶の一部が合流して国民議会ついで憲法制定議会を構成したところからはじまっている。その段階では、革命はまだフランスの一般民衆と遠いところにあった。民衆（とりわけパリの）は、

食糧不足と困窮から小さな騒乱を頻発させてはいたが、差し迫った目前の生死に関わる利害しか問題ではなかった。かれらを革命勢力に引きつけたのは、やはりバステューユにおける国王の軍隊の民衆に向けての発砲や、民衆に背を向けての国王の逃亡といった具体的な事件が、大きな要因であった。そして何よりも、近隣の列強諸国がフランスを包囲して、威嚇する姿勢を見せたことが国民的結束へとかれらを動かした。スタンダールは言う。

「民衆が力を持ち、なにもなかであるのは、かれらが怒っているときだけである。怒っているとき、民衆はいかなる犠牲も辞さない」¹

周知の通り、フランスの革命政府は、貴族階級を中心とする国内の反革命勢力と戦わねばならなかっただけでなく、反革命勢力が援助を求め、また革命の波及するのを恐れてフランスの革命政府を潰そうと企図する近隣の旧体制の国々と戦わなければならな

かった。まず、一七九一年、神聖ローマ皇帝レオポルト二世とプロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム二世がピルニッツで会谈し、フランス王家への支援と革命政府への武力行使の可能性を宣言して、これに圧力をかけてきた。このあとは、フランスの革命政府がオーストリアへ宣戦布告することになり、プロイセンとはヴェルダンついでヴァルミーで戦いを交えなければならなかった。とりわけ、一七九三年に国王ルイ十六世を処刑してからは、列強諸国は対仏大同盟を組み、新生共和国は四面楚歌の状況に置かれた。政府は、国内をまとめることに腐心する一方で、外国の介入を排除し、また同時に諸国にフランスの新体制を受け入れさせるために、戦争に突入することが避けられなかった。

言うまでもなく、こうしたなかで頭角を現わしたのが軍人のナポレオン・ボナパルト（一七六九―一八二一）である。一七九四年のトゥーロン攻撃で名をあげ、九五年の王党派の暴動を鎮圧し《ヴァンデミエール（ぶどう月）将軍》の異名をとり、その翌年にはイタリア遠征軍を率いて、当時はオーストリアの支配下にあったミラノを占領、その破竹の勢いはフランスの栄光を担い、個人崇拜すら巻き起こした。

フランス国民の軍隊を率いたナポレオンの対外的な戦鬪の勝利によって、かつて国王の臣民であったフランスの民衆は、このときはじめて《自分の国》というものを意識し、自分がフランス国民であると意識したと言っていだろう。

1

スタンダールは自伝的作品『アンリ・ブリュラーの生涯』（一八三五―三六執筆）で、革命時代を回顧して、かれの父親とその友人たちは王党派であり、かれらがルイ十六世の死刑判決と処刑を嘆き革命政府を呪っていたのに対し、幼いかれは国王の死を熱望していたと書いている²。そこにはかれが父親とその仲間の僧侶やブルジョワに対して抱いていた反発の感情が潜んでいるが、国王が神聖ローマ皇帝と結託してオーストリア軍を革命政府の軍隊に對峙させ、自国の軍隊に銃を向けさせたことで、国王を裏切者と考えていたとも書いている。はたして、一七九三年には十歳であったアンリ・ベールがそこまで考えていたものか疑問符を置かざるをえないが、国王の処刑という前代未聞の事件は、かれのまわりの反応に見られるように、革命政府に対する反感を広く引き起こしたことは言うまでもない。これは、長きに渉って、フランス国民であるということが、フランス国王の支配（考え方によっては庇護）のもとにいたことであり、国王はいわば一家の長であるという漠然とした意識が浸透していたからである。ルイ十四世の《朕は国家なり (L'Etat, c'est moi) 》という有名な言葉ではないが、いわば国王が国家であったゆえに、その主人を亡くすことは、一部の国民に国を失ったとき思えば抱かせたことだろう。

スタンダードの指摘によれば、革命政府のルイ十六世に対する処遇については、「あなたも親友か身内に対するものであるかのよう」に心配されていたのであった。

スタンダードは『ブリュラー』の同じ箇所「必要なときには祖国のために死ぬことが厳しい義務だと考えていた」と記している。かれがここで言う「祖国」は、国王を主人に頂く王国ではないことは言うまでもない。「祖国 (la patrie)」という言葉自体は、ラテン語のパトリア (父の国) を語源とする古い言葉だが、一七九二年、革命政府の支援にフランス各地から連盟兵が参集したなかで、マルセイユの兵たちが歌う《ラ・マルセイエーズ》の「いざ祖国の子よ、栄光の日は来た」というルージェ・ド・リール大尉の詞によって、当時人口に膾炙した単語である。スタンダードが帰属意識を抱くのは、革命によって九二年に誕生した共和国なのである。おそらく、民衆は未だ見たことのない共和国に対する不安が大きかったろうし、革命政府の中で繰り返される権力闘争と、恐怖政治 (九二年から翌年にかけての、革命やもつかの権力者に反対する者の粛清) は、未来を暗く感じさせたことであろう。しかしながら、若い世代は、そこに希望を抱き、とりわけナポレオンがイタリアにおける戦闘でオーストリアの軍隊を撃破していくに及んで、共和国に対し祖国愛を感じはじめていた。スタンダードは『ナポレオンに関する覚書』 (一八三六年執筆、以下『覚書』と省略する) で次のように書いている。

「いまだ子供に属する年頃に体験した共和主義的美徳に対する熱狂。戦いの相手である国王たちのやり方に対して抱き、さらにはかれらの軍隊が実行していた単純極まりない軍隊の慣わしに対してさえも抱いた憎悪に近い極端な軽蔑、これらが、一七九四年のわが国のたくさんの兵士たちに、フランスだけが道理をわかまえた存在であるという感情を抱かせたのであった。自分たちを繋ぐ鎖をそのままにしておこうと戦うヨーロッパの他国の住民は、われわれから見れば、情けないバカか、われわれを攻撃している専制君主たちに身を売ったベテン師としか映らなかった」^③

スタンダードは一般化しているが、これはかれ自身が青年時代以降に抱いた思いであろう。対外戦争に備えて九三年から募兵がはじまっているが、それに応募した兵士のどのくらいが、「道理をわかまえた (raisonnable)」国民としての意識をもっていたのか。また前線で戦うこうした兵士は別にしても、共和制のフランスは、当時国内でどのくらいの民衆の支持を集めていたのだろうか。国内の混乱が続くなか、九六年にはナポレオンの第一次イタリア遠征がはじまるが、すでに述べたようにこの遠征における戦闘の勝利の一つ一つが、民衆を共和国へ結束させていった。スタンダードは「熱狂 (enthousiasme)こそが、共和国を維持するために必要不可欠なものである」と述べているが、この戦勝は熱狂を煽り、危機にある祖国への愛を掻き立てたのであった。

こうした共和国とそれを代表する軍人ナポレオンへの共鳴を背景に、イギリス軍を討伐することを目的にインドへ向かい、エジプトで引き返してきた当のナポレオンは、九九年ブリュメール（霧月）十八日に武力で議会を解散させ、権力を奪取することになる。祖国への愛は、漠然としたものから、もつと明瞭に目に見えるナポレオンという個人に対する崇拜を通して定着していくが、それは愛国心を煽ることから、国家主義、さらには極端な愛国排外主義（フランス語のショールヴィニスムないしは英語のジンゴイズム）の方向に人心を転回させなかっただろうか。

2

スタンダールは先に見たように、共和制の祖国を愛する《愛国者》であった。かれは一八〇〇年の第二次イタリア遠征に従軍し、それを誇りとしているが、それは偶々かれの遠縁にこの遠征軍の監督官に任命されたピエール・ダリュ（一七六七〜一八二九）がいて、理工科学校に入ることを目的にパリに出てきたものの、それを翻意してダリュ家の厄介になっていたかれとしては、ピエールに従うのに愛国の情は関係なかった。かれは非戦闘員として参加し、糧秣の調達や経理事務を行ない、翌年には少尉に任官している。スタンダールの軍歴は、ナポレオンが皇帝を退位する一八一四年まで、断続的なものであるが、帝政時代には主計官補とし

てのドイツ各地での任務、モスクワ退却での糧秣の確保などに従事している。それは作家の十七歳から三十一歳までにあたり、かれの青春はナポレオンが君臨した時代と重なる。つまり、ナポレオンはかれの青春だった。スタンダールがナポレオンを語るとき、一種のスターに対する憧憬のようなものが付きまとい、ナポレオンを見たことを得意に語る様が見られる。ただし、ナポレオンを終始称賛しているわけではない。その軍人としての功績は評価するものの、皇帝となり独裁の道に突き進んだナポレオンに対してはのちに厳しい考えを述べている。かれはナポレオンを「専制君主 (le despote)」と呼ぶことをためらわない。スタンダールは前述の『覚書』の「まえがき」で次のように書いている。

「一七九七年においては、みなはかれ（ナポレオン）を留保なしに熱烈に愛することができた。かれはまだ祖国から自由を盗み取っていなかった」⁵⁾

スタンダールはつねにナポレオンの功績は認めながらも、皇帝になってからのふるまい、おのが祖国に対する功績を自賛し、自ら栄光を纏うようになったことを、のちに批判的に書かざるをえなかった。スタンダールは同書で「ナポレオンは、皇帝の称号を得ることによって、自らの生涯を深刻な喜劇に陥らせている」⁶⁾とも書いている。

しかし、ナポレオンのもつと勤務していたときは、かれがナポレオンを批判的に見ていたかどうかははっきりしない。上司の命

令に従ってとりあえずは仕事に専念していたと受けとることができる。またかれはことさらに自分が祖国を愛していることを公言するようなこともなく、国のために軍隊で働くことがそのまま祖国を愛することになるとあらたまった認識を持っていたわけでもない。フランスは共和国から帝国へと変貌していくのだが、そうした変化を批判的に見ていた様子も伝わっていない。

スタンダードの文学的出発は、一八一四年に王政復古となり、軍人の仕事から放り出されてからである。フランスで新しい仕事にありつけず、ミラノで無為徒食の生活をはじめてから、かれは本格的に執筆活動をはじめが、そこでは当然三十年の前半生が、ミラノの現在と同時にかれの執筆素材となる。しかし共和制から帝政時代にかけての政治や社会に関する著作物は、生涯を通じて死後に出版されたナポレオンに関する未完の下書きにすぎない二つの著作、つまり一八一七年から翌年にかけて執筆した『ナポレオン伝』と、それからほぼ二十年後に着手し放棄した前述の『覚書』があるだけである。時代も移り変わり、帝政時代の一八一〇年に復活した出版物の検閲は復古王政、七月王政にも引き継がれ、時の政府にとって不都合になるものを発表することができなかつたという事情もあるのだろうが、革命政府や共和国フランスを正面から取り上げた著作ないし草稿はない。

『ナポレオン伝』は、ミラノで出会った人々にかれが見たナポレオンについて語ったことを核として、スタール夫人の『フラン

ス革命の主要な出来事に関する考察』(一八一七)におけるナポレオンに対する誹謗への反発を契機に筆をとることになったもので、スコットランドの雑誌『エディンバラ・レビュー』の記事のほか多くの資料をスタンダード流にアレンジしている。しかし、これはうまくまとめきれないままに完全に下書きで終わっている。一方『覚書』は、ラス・カースによるナポレオンの回想録『セント・ヘレナ日記』全六巻(一八二二〜二六)出版後に、この新資料をもとに再度ナポレオンに関して書きはじめたものだが、同じように完成していない。英雄とほぼ同時代を生きた作家としては、その時代とともにナポレオンの全貌を書き残したかったのであるが、この壮大な意図は実現できなかった。

スタンダードがこれらの著作において注目するナポレオンの施策の一つは、その栄光礼賛である。つまり、祖国愛を煽るやり方である。ナポレオンはレジヨン・ドヌール勲章を創設し、祖国に對して功勞をたてた人物を顕彰したが、スタンダードは「祖国の役に立った人はことごとくこれをもらった」と書いている。またこうも書いている。

「薬屋の店裏でどんなささやかな仕事をしている小僧も、もしも大発見をすれば、勲章を貰って伯爵に叙されるであろうという考えに煽られていた」⁸⁾

この考えは同時期に出版された『一八一七年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』(以下『ローマ、ナポリ』と省略する)でも繰り返

返されるが、かれの代表作『赤と黒』(一八三〇)のなかでは、ナポレオンを崇拜する主人公ジュリヤンが、時代の推移で、戦争で功績をあげて出世することがかなわないために、僧侶になって出世を計ろうとする、ということになる。ナポレオンと愛国心の高揚は、出世ないし褒章を媒介にして結びついている。

3

スタンダールは留保なしにナポレオンを賛美することも、自国を称賛することもない。繰り返すが、かれは祖国に対する愛をわざわざ喧伝することもない。むしろ、自国を賛美することを「控えの間の愛国心 (le patriotisme d'antichambre)」⁽⁹⁾と云って軽蔑している。この表現は『ローマ、ナポリ：』ではじめて登場するのだが、チュルゴがド・ペロワの悲劇『カレー攻囲』⁽⁹⁾について言った言葉としてだけ紹介され、のちに『恋愛論』(一八二二)においても同じ紹介が繰り返される。⁽¹⁰⁾そして『ローマ、ナポリ、フィレンツェ (第三版)』(一八二七)では、次のようにエピソードとして説明されている。⁽¹¹⁾

「二七六三年頃、『カレー攻囲』がもつともバカげた、またもつとも国民的な成功を獲得した。詩人のド・ペロワは、のちに他の人にも利用された、自国民におもねるといふ金になる考えを抱いたのだ。デイヤン公爵がある日この悲劇を嘲笑し

た。(では、きみはボン・フランセではないのか)とレイ十五世はかれに言った。——〈殿、悲劇の詩句がわたくしめほどにもそうであればよいのですが〉

「自国を愛し、媚びへつらいの中に阿呆とのペテン師のやりとりしか見なかつた賢明なチュルゴは、ペロワ殿の卑しいお世辞を称賛するお人よしの心酔に、控えの間の愛国心と名づけた」(傍点部分は原文イタリック、以下同じ)

スタンダールはこの説明に続けて、こう付け加えることも忘れない。

「ボナパルトはド・ペロワを真似て、フランス国民を服従させたいときに、かれらに偉大な国民と呼びかけた。かれ自身この手品を自慢している」

つまり、自国や自国民をもちあげ称賛すること、またそれに同調することをこう名づけていると言っている。スタンダールは上記二つのイタリア紀行文で、この「控えの間の愛国心」がイタリアの大きな欠点であると指摘する。当時イタリアはまだ一つの国家として統一されていなくて、小国に分裂させられていた。そして、それらのそれぞれ伝統を持つ国は張り合い、住民たちも自国(つまり自分の地方や町)に対する矜持が強かった。スタンダールがイタリアの各地でぶつかるそのお国自慢に辟易としていた様子さえ見られる。

「チュルゴ氏の言う控えの間の愛国心は、イタリアの一大滑稽

事である。それぞれの町は自分の町の拙劣な作家たちを夢中になつて擁護している⁽¹²⁾」

他の箇所でも、イタリアでは愛国心（愛郷心）はどこにでもあり、「町の栄光」を擁護することに熱心で、少しでも批判を加えると洗聖になる、と言っている。スタンダールは、イタリアの各都市がそんな状態にあるうちは統一がおぼつかないと書かざるをえない。ある町は別な町を嫌い、国民が一致団結できないと指摘している。かれはこの事態を裏返しにして、支配するためには分割することが近道だという法則のようなものを導き出している。

スタンダールがこうした排他的な愛国心を嫌っていたことは、のちにフランスに戻つてから、イギリスの劇団によるシェイクスピアの上演が妨害されるという事件に遭遇し、これに対して『ラシーヌとシェイクスピア』（二八二三）を発表したことも見られる。この事件は、一八二二年の七月にイギリスの劇団がパリに来て、ポルト・サン・マルタン劇場で『オセロ』を上演したが、観客の妨害にあつて途中で中止となり、日を改めて小さな劇場で上演することになったというものである。これは、一八一四年にイギリスをはじめとする連合国にフランス（帝国）が敗れたことを根に持っていた市民の暴挙だった。スタンダールはこの見当はずれの愛国心に対して、早速『パリス・マンズリー・レヴェュー』の十月号と翌年の一月号で、純粹に文学的な立場から反論を加えた。まず、どんな新聞も、フランスの演劇が世界第一級の演劇であり、

唯一の合理的演劇であると宣言し、これに反駁できないような状況があると述べる。スタンダールはあえてシェイクスピア演劇の優れている点を明らかにしたうえで、これを擁護しているのである。そして、シェイクスピアがイギリス人であるからといって、これを口笛でやじることが国家的な名譽心の発現であると思つている人々を批判している。『ラシーヌとシェイクスピア』は、古典派に対するロマン派の文学的対立という構図の根底で、当代のフランス人のものの見方の偏狭さを告発している。

4

スタンダールのものの見方は、国家主義のはびこるなかで、優れているものはそれがどこの国のものであれ、優れていると認めるといふものであり、これは今から見れば至極あたりまえのことである。その一方で、厳しい目を向けることもあり、自国のものに対してはことさらに否定的である。かれは、フランスの音楽や美術については、つねに否定的である。たとえば次のような書き方をしてゐる。

「フランス人がいつか音楽を理解するなんてありえない。この点では、かれらはきわめて著しく誤つた才能を持つてゐる。似て非なるものに拍手を送り、美しいものは平凡だといつて見逃す⁽¹³⁾」

もしくは、

「美術に関するかぎり、フランスはなんとしても小ぎれいの域を出ない」⁽¹⁴⁾

スタンダールはこうした否定的な書き方をするのでフランスの読者の反発を買うことを予測して、『ローマ、ナポリ…(第三版)』のなかで、皮肉を交えてこう書いている。

「ほんとうの愛国者はこの本を火に投げ入れて、しかもこう叫んだにちがいない。著者はフランス人ではない」⁽¹⁵⁾

自国を賛美する者が愛国者としてまかり通っているのが現実なのである。スタンダールも決してフランスの優れている部分を無視しているわけではないが、いわば自画自賛になるような書き方はしていない。それこそ、ともするとかれの言う「控えの間の愛国心」に陥りかねないからである。スタンダールはそうしたことで愛国心をひけらかすことが、何かしら胡散臭いことであることを熟知している。

かれは、王政復古時代、再びオーストリアの支配下に組み込まれて独立できないでいるイタリアに滞在しても、優越感をちらつかせることはない。フランスは革命を経ている兄貴分の国であり、そうした国から来た人間としてイタリアの現状と未来を考える。自国を自慢することなく、かれはこう述懐する。

「フランスはヨーロッパでいちばん幸福な国であると思う」⁽¹⁶⁾
そしてまた、自国を批判的に見て、こうも言う。

「フランスは滑稽と一大首都の専制的支配によって、独創性を失っている」⁽¹⁷⁾

スタンダールはイタリアにいて、むしろ自国の欠点、劣った点の数々を探し出す。イタリアないしイタリア人は、フランスとその国民について様々なことを気づかせてくれる。かれはフランス人について、虚栄心が強く、気取りやで、目立ちたがりであることを指摘する。そして、フランス人お得意の様々な機会を捉えては洒落た表現をひねり出すとするエスプリ(機知)についても、かれは我慢ならないと感じる。そこには他を見て、自らを振り返るといふ姿勢が感じられる。これは、場合によってはフランスよりもイタリアを持ち上げているようにも見えるが、イタリアについても決してメリットだけを書いているわけではなく、先に触れた「控えの間の愛国心」もそうであるが、青年の中に蔓延するペダンティズムがこの国を毒していることなど、イタリアにおける問題点を指摘し、それを改めるように強調している。かれは、愛するイタリアがオーストリア支配下で不振を託していることを嘆き、その国民を鼓舞するようなことを書いている。そして、自由を希求しているものの、自由のメカニズムを研究することを怠り、ただひたすら共和制に憧れて、「ある朝天使がそれを運んでくられると思っ」⁽¹⁸⁾と手厳しい。

しかしフランス人である作家は、フランスについて悪く言われることにはやはり反発を感じないではいられない。それは『ロー

マ、ナポリ：』におけるヴィットリオ・アルフィエーリ（一七四九～一八〇三）に関する記述に見られる。⁽¹⁹⁾この記事のほとんどは一八一〇年一月の『エディンバラ・レビュー』からの借用であるが、スタンダード流にアレンジしている。

アルフィエーリは、スタンダードが二十歳頃に劇作を試みたときのいわば師である。かれはまず翻訳で作品を読み、ついでイタリア語版を入手して、このイタリアの劇詩人を手本に文体と作劇術を学び、またこの詩人の劇中に見られる少し過激な政治思想に共感して、かれを共和主義者として敬意を払っていた。しかし、その熱は時とともに覚めはじめた。スタンダードは前掲書の五月十一日付では、アルフィエーリが民衆の側に立つようなポーズを取ったが、かれのなかの貴族が優勢となつて、フランスとフランス人を憎悪する「極右反動以外の何ものでもない」と決め付けているが、それがアルフィエーリの書いた『フランス人嫌』 Misogallo という詩のせいであることが窺われる。

スタンダードは『ローマ散歩』（一八二九）のなかでは次のように書いている。

「これらの連中（イタリアのへぼ詩人）は、アルフィエーリのすべてを、フランス人に対する愚かな怒りまでも、模倣している。アルフィエーリは、パンタン税関で千五百卷の仔牛皮装丁本を没収されたことで、ヨーロッパやアメリカに両院をもたらずはずのあの革命を絶対に許さなかった」⁽²⁰⁾

これらのアルフィエーリ批判では、スタンダードは努めて客観的であろうとしているが、そこに愛国の情を滲ませている。スタンダードの言説の中には、フランスとフランス人を憎むアルフィエーリに対してよい感情を持っていないことが現われている。

5

スタンダードは、生まれ育ったフランス南東部の町グルノーブルに対して、繰り返し「憎しみ」を吐露している。そこで幼少の頃に愛する母を失い、父に対しては反発を抱き、さびしい日々を過ごしたために、少年時代にはこの町を早く出たいと望んでいたと言う。かれは『ブリュール』で、次のように書いている。

「グルノーブル、それは父を意味したが、そこを去りたいという情熱、そして数学に対する情熱が、一七九二年から九九年まで、わたしを深い孤独に投げ込んだ。数学はこの町を出るための唯一の方法だった。わたしはこの町を憎んでいたが、今もそれは変わらない。というのも、わたしが人間を知ることとを学んだのがこの町であったからだ」⁽²¹⁾

実際、スタンダードは一七九九年にパリの理工科学校に入学するためにグルノーブルを出て以来、郷里へはイタリアへの行き帰りの際に短期間立ち寄りたり、妹ポーリーヌの亡夫の遺産問題の処理や父の遺産相続などの用件で帰ったりと、滞在は数えるほど

である。まして、この町に帰って住むことなどは考えてもみなかった。幼少の頃に母を失ったことが、一種のトラウマになっていたのだろうか。先に掲げた自伝的作品には故郷での数々の思い出が細かく記されている。にもかかわらず、かれの郷里に対する感情はよいものではなく、いわゆる愛郷心なるものは不在である。

しかし、だからといって、首都のパリに着いて、そこがすぐに気に入ったかというところ、そういうわけではない。かれは同じく『プリュラル』で書いているが、「パリと数学の勉強にあこがれていたが、山のないパリにとっても激しい嫌悪感を抱き」、山に囲まれたグルノーブルの町に郷愁の気持ちさえも抱くのである。それでもパリを愛したのは、グルノーブルを嫌っていたためであるとかれは洩らしている。⁽²²⁾

そのスタンダールがいちばん親近感を抱くのはイタリアのミラノである。かれは、一八〇〇年にナポレオンの第二次イタリア遠征軍に従ってこの町を訪れて以来、何度か来訪し、王政復古時代には一八一四年から二年まで暮らしている。かれ自身はすでに中年に達していたが、この町でイタリアを知り、音楽や美術に親しみ、イタリア女性を愛し、文人たちとの交際を広げてかれの教養を培うことになる。

ミラノ滞在中、かれはイタリア人のなかに自然さと善良な気質を発見し、いわゆる「人のよさ (la bonté)」にフランス人との対極を見る。かれはイタリア人に気安さを感じ、フランスにいる

ときに抱く用心、つまり「滑稽 (le ridicule)」に陥らないための用心をしないで済むことから、心を寛がせている様子が見られる。何しろフランス人は、前節で記したように、虚栄心が強く、気取りやで、目立ちたがりやである、とかれは考えている。そこからかれは祖国というものを次のように考える。

「ほんとうの祖国とは、自分に似た人にいちばんたくさん出会う国である。わたしはフランスにいますといつも、どんな社交の場でも、冷ややかな調子にぶつかるとはならないかと恐れている」⁽²³⁾

スタンダールはミラノを祖国と考えていたのだろうか。それはかれが墓碑に刻むように遺言した「ミラノの人」という一語にも現われている。

かれのミラノ滞在中は、一八二一年にそこを発つたのが最後となり、その後は、オーストリアに敵対的な書物を出版した作家であることが発覚して、滞在許可がおりていない。一八二七年には、入市するやそこを十二時間以内に立ち去るよう命じられ、三〇年には領事に任命されてトリエステに向かう途中、オーストリアのヴィザ発給を求めするために一日だけ留まることのできたという状況である。それにもかかわらず、スタンダールにとってこの町は忘れがたい町となり、かれのイタリアとなる。また、かれにとつて、永住することがかなわなかったこの町が、グルノーブルに取って代わって懐かしい郷里となる。

スタンダードは一八三〇年の七月革命後から四二年にパリで死去するまでの残りの生涯を、就職活動が功を奏して（といってもかれには不満だったようだが）、ローマの北の小さな港町チヴィタ・ヴェッキア駐在のフランス領事に就任しているが、その勤務ぶりは必ずしも政府の意に適うものではなかった。外務大臣にとつては、かれが公務員として必ずしも国のために献身的に働いているように見えなかったようだ。この文人外交官は、任地を勝手に離れ、また休暇申請を出してはパリに舞い戻り、国内外を旅していたのだから。

それでは、生まれ育った国フランスを愛する気持ちはどうなったのだろうか。それはわざわざ問うことではないだろう。かれの著作の隅々まで、フランス人としてのアイデンティティーが貫し、フランスとフランス人への想いがあふれている。フランス批判こそ、かれの祖国に対する愛ではないか。フランスに生まれ、その国のパスポートを持ってヨーロッパ中を旅しているスタンダードにとつて、自分がフランス人であることを絶えず意識していただろうし、かれがイタリアを愛していても、イタリア人に成り代わるものでないことは自身はつきりと解っていたことであろう。イタリアのすべてを愛し、それに近い気持ちを抱き、そこを祖国と感じた「ミラノの人」は、遺言によりパリのモンマルトルに永遠の住まいを得て、フランスに安らいでいる。

おわりに

スタンダードはイベリア半島を除いて西ヨーロッパのかなりの部分に足跡を印している。こうした旅がかれの知見を広げたのは言うまでもない。現在のように居ながらにして世界中の情報が入手できるわけではなく、外国の情報は新聞・雑誌など出版物でわずかに入ってくるばかりであり、それも国に不利益をもたらすものと判断されれば、国境で差し止められていた。確かに、国の外のこと、旅行案内書や旅行記ないし回想録で知ることができたろうが、それもそんなに情報量が多いわけではなく、外の世界を垣間見る程度であつたにちがいない。自分の国を実際に出て見なければ、自国の外は見えなかったというのが現実だった。それは、また自国をも見えなくしていた。スタンダードの愛読する思想家モンテスキューは、『ペルシア人の手紙』（二七二）で、パリにきたペルシア人がパリで見聞したことを郷里イスファファンの友人知人への手紙に書くという形式で、パリ風俗を批判したが、スタンダードはペルシア人になつたつもりで、フランスを見ようとしている。かれは自分をフランス人という属性から引き離して、できるだけ客観的に自国を見ることに努めている。それはもちろんかれが、フランス以外のヨーロッパ各地を見て、観察と考察をめぐらした結果である。

国際人スタンダールが自国についてあれほど批判的に書くのは、自分がフランス人であるゆえになおさら、同国人が気づかぬ（あるいは気づいていながら気づかないそぶりをして）その国民性や、意識せずに陥っている欠点ないし不足している部分などを指摘する必要性を感じるからである。それはまたイタリアについても同じである。かれは、愛するものの墮落は嘆かわしいと言いが、嘆くのみならず、問題点をあげつらって、それらへの注目を促している。繰り返すが、かれが批判するのは愛するがゆえになのである。そういう意味ではかれはまさに愛国者であろう。それは自国を賛美するだけの愛国者の対極にある。スタンダールは、文学修行の手法とした劇作家モリエールをはじめとして、自国には他の国には見られない立派な文学的伝統があることも充分承知している。また、他国に先駆けて共和国を実現するなど、優れた点が多々あることも認めている。しかし、フランスの作家として、フランス人に向かつてそれを自慢したところでどんな意味があるだろう。それこそかれの言う「控えの間の愛国心」に陥ることである。

したがって、かれの言う愛国心とは、敷衍して言えば、自国を思いやり、国際的視野で自国を眺め、これに対して忌憚ない批判を加え、自国をさらに他国に対して恥ずかしくない、誇れる国にしようと思う心である。かれが次のように言うとき、それは自分の精神の所在地として求めていたものを指し示しているのではないだろうか。

「わたしたちは英国人の偏狭な愛国心からほど遠くにいる。世界は、わたしたちの目には、とても異なる真実をもった両半に分かれている。一方に阿呆とペテン師、もう一方には、偶然から高貴な魂と少しの才知を与えられた特権的な人がいる。後者の連中がヴェツレトリで生まれようと、サン＝トメールで生まれようとわたしたちは同郷人だと感じている」²⁴

ここで重要なのは「高貴な魂 (une âme noble)」という部分だろう。そうした人々に出会えるところなら、精神の祖国としてスタンダールはいずれも祖国と考えたのだった。フランス国民でありながら、ミラノを祖国と考えたのは、そうしたかれのコスモポリタンとしての生き方からだったと言えよう。

テクスト

「一八一七年のローマ、ナポリ、フィレンツェ」「ローマ、ナポリ、フィレンツェ (第三版)」「ローマ散歩」は、ブレイヤード版『イタリア紀行文集』(一九七五) による

その他の作品は、セルクル・デュ・ピリオオフィロ版スタンダール全集による

註

- (1) 『ナポレオンに関する覚書』(以下『覚書』と略す) 一〇四ページ
- (2) 『アンリ・ブリュラーの生涯』(以下『ブリュラー』と略す) 一六

- 一ページ
- (3) 『覚書』二〇ページ
 - (4) 前掲書一〇四ページ
 - (5) 前掲書一二ページ
 - (6) 前掲書八一ページ
 - (7) 『ナポレオン伝』一九四ページ
 - (8) 前掲書一九三ページ
 - (9) 『イタリア紀行文集』(以下『紀行文集』と略す)四二ページ
 - (10) 『恋愛論』第二卷三二ページ
 - (11) 『紀行文集』四〇六ページ
このエピソードは、スタンダールが愛読していたフリードリヒ・メルヒオール・グリム(一七三三〜一八〇七)の『文芸通信』(一八二二〜二三)に掲載されているとのことである。イヴ・アンセル他編『スタンダール事典』(二〇〇三)参照
 - (12) 前掲書五五ページ
 - (13) 前掲書一二三ページ
 - (14) 『恋愛論』第二卷二二二ページ
 - (15) 『紀行文集』五二五ページ
 - (16) 前掲書一一四ページ
 - (17) 前掲書一四九ページ
 - (18) 前掲書八八ページ
 - (19) 前掲書九一ページ
 - (20) 前掲書一一八ページ
 - (21) 『ブリュラー』第一卷一〇五ページ
 - (22) 『ブリュラー』第一卷二三三ページ
 - (23) 『紀行文集』九八ページ
 - (24) 前掲書一〇四八ページ